

## 作業的存在 Occupational Being

吉川ひろみ

県立広島大学

### 作業で自分を定義する

自分が行ったことによって自分が定義される。現在研究者になっている人は、たぶん一生懸命勉強した人だろう。興味をもって本を読んだり、自分から調べたりしてきた人だろう。どんな勉強も嫌いで、すぐに居眠りをしてしまう人が研究者になることは、滅多にないだろう。

私は、子どもの頃からよく動く子どもだったらしい。踊ったり歌ったりしたし、小学校から高校までピアノを習っていて、学生時代は人形劇クラブや合唱サークルに入っていた。5年くらい前からプレイバックシアターという即興劇を行っている(吉川, 2017)。何をするか、何をしないか、によって、今どんな人なのかが決まる。自分という存在が、自分がしてきた作業によって決まるのである。これが作業的存在という捉え方である。

「蛙の子は蛙」、「ぞうさん、ぞうさん、お鼻が長いのね。そうよ、母さんも・・・」というのは、遺伝を中心とした存在の捉え方である。「朱に交われば赤くなる」、「門前の小僧習わぬ経を読む」というのは、環境を中心とした存在の捉え方である。いろいろな存在の捉え方がある中で、作業を中心とした存在の捉え方もある。

作業的存在は、行うこと(doing)から存在(being)を考えるが、長い歴史の中では、存在(being)から何を行うか(doing)が決められてきた。誰の子どもか、どの家に生まれたか、女か男か、心身機能障害があるか等によって、どこの学校に行くか、どんな職業に就くかが決まるが多かった。個人の自由や基本的人権を重視しない社会では、作業的存在を考える機会はなかった。

自由で公平な社会では、誰でも多くの作業を経験する機会がある。いろいろな作業をやってみると、感情が生まれ、自分の得意不得意、好き嫌いがわかる。その作業を続けるか、止めるかを決断したり、できない作業が様々な工夫や援助によってできるようになったりすると、その作業を通して、自分が変化したり成長したりする。こうして、作業をすることで、自分自身ができあがっていくのである。

### Doing, Being, Belonging, Becoming

1998年にモントリオールで開催された世界作業療法学会でのアン・ウィルコックの講演「Doing, Being, Becoming」を聞いた時、衝撃を受けた。お菓子ばかり食べている(doing)と太る(being)というイラストが鮮明に蘇る。その後、ウィルコックの本にはBelongingが追加され、 $sh=d+b3$ という式まで示された(Wilcock, 2006)。生き延び(s: survival)、健康でいる(h: health)ということは、何かを行い(d: doing)、何者かになり(b: being)、何者かになっていき(b: becoming)、どこかに所属する(b: belonging)ということなのだ。その後、ウィルコックとタウンゼントは、 $b3$ となる $d$ こそが作業だと述べた(Wilcock & Townsend, 2014)。

1992年にデビューして、2018年に引退予定の安室奈美恵さんを例にとると、幼い頃から歌って踊っていて(doing)、歌手になった(being)。ミニスカートにロングブーツを共通項とする「アムラー」という集団を生み出し、彼女のファンから構成される社会の中心として所属してきた(belonging)。さて引退してどうなるのだろうか、どうなっていくのだろうか、将来に向かって何らかの存在になっていく(becoming)のだろうかと思う。

being, becoming, belonging 全てを満たす doing が、作業的存在を具体化する見方だとすると、自分にとっての doing は何だろうと考えることができる。その doingこそが、自分の作業だといえる。

私は、よく編み物をしている。結構器用だなと自分でも思うし、人からもそう言われる。完成品を家族や友人にプレゼントする時は、気遣いのある人だとか、その集団でのポジションを補強したりすることがある。だから私が編み物をする(doing)は、being につながり、belonging になることもたまにはある。しかし、becoming になることはない。したがって、私にとって編み物が作業だと、強くは思えない。

本の原稿を書くとき、自分の考えを表明でき、読者からの反応を得ることができる。書かれた文章は私を離れて存在し続け、その時の私がどうであったかを教えてくれる。作業科学の原稿を書けば、作業科学に関心をもつ人たちとのつながりができ、集団が生まれ、そこに私も所属できる。したがって、編み物よりも本を書く方が、私の作業だといえる。

### 存在と作業

ハイデガーは、「存在と時間」という哲学書を書いた。その中で印象に残っているのは、「人はどういった存在であり得るか（企投）をめがけつつ生きている時間的存在である」（山竹）というところだ。私たちはどんな存在になるかについて、開かれた可能性がある世界に生きている。作業をしながら未来に向かって開かれた世界に生きているのである。

かつての同僚の哲学者である岡本珠代先生が言っていた。「作業科学と作業療法を知ることで、人は何のために生まれてきたのかという問いに答えることができる。それは作業をするためである。」

私たちは、ほとんど何も知らずに、準備も不十分なまま、この世界に生まれてきた。そして時間経過と共に、少しずつ今の自分になってきたのである。保育園に通い始めた頃、園のルールがわからず、仲間外れになっていた。

小学校や中学校に入学したばかりの頃は、クラスメートも教室もよそよそしく感じられた。30歳を過ぎて留学した時は、誰も知る人のいない別世界で心細く所在なく暮らし始めた。しかし、その場所で少しずつ何かを行い、環境に馴染み、作業に慣れ、時間がたつに従い、以前よりも自由に創造的な自分になっていったと思う。

何の作業を、いつ、どこで、どのように、誰と行うのかを、みんながこれから決めることができ、いつでも変えることができるような世の中になればいいと思う。時間は止まることがない。昨日から今日へ、存在が変化を続けるように、今日から明日へ、変化が起こるものなら、よりよい変化になるように、私たちは作業をすることができるのである。

### 文献

吉川ひろみ (2017) : 「作業」って何だろう 第2版. 医歯薬出版.

Alsaker, S. (2009). *An occupational perspective of health*. Slack, Thorofare.

Wilcock, W. A., Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Schell, B. A. B., Gillen, G., Scaffa, M. E. (Eds). *Willard & Spackman's occupational therapy 12th ed.* Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp. 541-552.

山竹伸二 : 『存在と時間』を読む <[http://yamatake.chu.jp/03phi/1phi\\_a/2.html](http://yamatake.chu.jp/03phi/1phi_a/2.html)> 参照日 2018年3月26日